

恋愛用語「失恋」の成立と中国語への伝播 についての一考察

清 地 ゆき子

0. はじめに

明治期に日本で創出された大量の人文社会科学系の近代訳語は、20世紀初頭、新聞や翻訳を介して中国語に受容された。その後の日中語彙交流について、「1919年の五四新文化運動以降、高度な、特殊な専門用語のほかに、社会主義運動の革命語彙、文学用語、時事語が引きつづき伝来した⁽¹⁾」という指摘はあるものの詳細な考察は少ない⁽²⁾。

1920年代、日本に留学していた張資平（1893-1959）をはじめとする、創造社の作家たちの作品には、当時の日本文学の影響を受けてか、日本語借用語彙、特に恋愛に関する用語（以下、恋愛用語とする）の使用が多く見られた。

朱1995の日本語借用語の認定基準「中国の古代文献に典拠を持つ語の場合は、①明治時代に「新しい意味」を日本語の方に早く出現していること。②西洋の概念を翻訳する過程で生じたもの。③それまでの中国語の語義が完全に更新され、その後の意味領域が改められていること」に照らすと、“愛情・愛人・初恋・恋人・失恋”などの恋愛用語が、1920年代に中国語に受容されたことが推測される⁽³⁾。

本稿では、1920年代に中国語に受容されたと思われる恋愛用語の一例として、「失恋」という訳語が、明治期以降、日本語に定着していく過程と中国語への伝播について考察したい⁽⁴⁾。

1. 日本語としての「失恋」の成立

「失恋」の最も早い使用は、管見の及ぶ限りでは、1896年の小栗風葉の「失恋詩人」に見られた。この小説の舞台は日本であるが、随所に英語表記が見られる。小栗風葉の代表作「恋慕ながし」（『読売新聞』1898.9.5～12.5）が、森鷗外訳「埋木」（『志がらみ草紙』第7号～第31号、1890.4～1892.4）からヒントを得ていることから⁽⁵⁾、この「失恋詩人」も欧米文学の翻案か翻訳作品の模倣とも考えられる。（例文の下線は筆者、以下同様）

1) ああ、君にも然う見えたかね、僕は寔に其、今日より哀れなる失恋の者だ。

情無い言を言うじゃないか、いや那麼女に失恋も何も要るものか、僕は又君の始中終の談の様子では、恐く最些憐う、異うに取済ました上品な女かと思つたら、いや月6兩くらいの代物だ、

(小栗風葉「失恋詩人」『文芸俱樂部』第2巻13号、1896.11、pp.138-139)

2か月後、泉鏡花の「恋愛詩人」にも「失恋」が見られた(用例2)。また、1898年の国木田独歩の小説には、会話文に「失恋」が使用されている(用例3)。

2) 詩人呆然として空しく帰る、ここに於いて失恋家となり、天を仰いで毎日ふさいで居る。(泉鏡花「恋愛詩人」『太陽』第1巻2号、1897.1、p.115)

3) 「富岡が失恋のために死ぬるやうな男だろうかそんな事はなからう」

(国木田独歩「死」『国民之友』第370号、1898.6、p.86)

以後、小説や翻訳などに「失恋」の使用が多く認められるようになる⁽⁶⁾。

「失恋」の辞典への最も早い収録は、1907年の『辞林』(金沢庄三郎編、三省堂)、『註解 和英新辞典』(山口造酒他、賞文館)に見られる。英和辞典では、1917年の『熟語本位 英和中辞典』(斎藤秀三郎、日英社)に、To be disappointed in loveの訳語として「失恋する」、1931年の『大英和辞典』(市川三喜他、富山房)に、lovelornの訳語として「失恋したる」が掲げられている。

このように、日本では、「失恋」は1896年に小栗風葉の「失恋詩人」に使用され、その後、創作や翻訳に使用され定着していったと思われる。

ところで、1894年の翻訳「わかきエルテルがわづらひ」(緑堂野史訳『志がらみ草紙』第54号、1894.3、p.27(原題:ゲーテDie Leiden des jungen Werthers))には、「初恋のうれしさ余りて、絶えず喜べるがために、つひに男の愛を失へる少女にむかひて、」と、「愛を失へる」という表現が見える。

幕末から1900年代初めまでの英和辞典、『英和对訳袖珍辞書』(堀達之助、1862)、『英和字彙大全』(市川義夫、製紙分社、1885)、『新訳無双英和辞書』(棚橋一郎、戸田直秀、1890)、『A new English-Japanese dictionary』(和田垣謙三、大倉書店、1901)でも、lovelornの訳語として「愛ヲ失フタル」が当てられている。つまり、「失恋」が創出される前は「愛ヲ失フタル」などが訳語として当てられていたと考えられる。

その後、1910年代から1920年代後半までの英和辞典では、lovelornの訳語

として、「愛ヲ失フタル」に加え、「恋人ニ見捨テラレタル」（『模範英和辞典』神田乃武他、三省堂、1911）、「恋人に捨てられた」（『新英和大辞典』岡倉由三郎、研究社、1927）などの訳が付加されている。

これは、「愛」は、神の愛、人の愛など意味範囲が広すぎるので、男女の「愛」に限定するため、「恋人に見捨てられる」などの訳が付加されたとも考えられる。

また、1893年刊行の『日本大辞書』（山田美妙）の、見出し語【あい】（愛）の項には、「同義 こひ（恋）」の説明として、「今日ノ普通ノ意味ニ因レバあいハこひヨリ意味ガヒロク即チあいハ一般外界ノ物ニ対シテノ想ヒニ差シ支ヘ無ク言ヘル、但シ、こひハ寧ロソノ一部分デ、主トシテ男女間ニ出ルイツクシミノ情ナドノ意味ヲ持ツ」と記されている。

恋愛が文学の題材だけではなく、「ことばの流行、やがて行為の流行として広まる⁽⁷⁾」中で、「失恋」の創出には、意味範囲の広い「愛」と、男女の関係を表す「恋」との意味の住み分けと関係があったのではないだろうか⁽⁸⁾。

2. 中国語“失恋”の成立

2.1 中国語の“失愛”について

中国語の19世紀中頃から1910年頃までの英華辞典類を確認すると、disappointment in love やlovelorn の訳語として“失愛”や“失愛的”が当てられている。

【失】失愛 lost favor（《五車韻府》R.Morrison 1819：ゆまに書房影印、1996）

【disappointment】disappointment in love 失愛（《華英音韻字典集成》

W.Lobscheid、企英訳書館増訂、1902：大空社影印、1999）

【lovelorn】失愛的（《英華大辞典》顔惠慶等、商務印書館、1908）

また、1908年に発表された魯迅の〈摩羅詩力説〉にも、所謂失恋の意味として“失愛”が使用されている。

4）記曼以失愛絶歡。陷于巨苦。

（魯迅〈摩羅詩力説〉〈《河南》第2期、1908.2、pp.87-88）

（マンフレッドは失恋して絶望し、苦しみの極に陥った）

（伊藤虎丸（代表）訳『魯迅全集』第1巻、学習研究社、p.114）

5）中有失愛自殺之人。（同前〈《河南》第3期、1908.3、p.62）

（その中に、失恋のために自殺をした者がいた）（同前『魯迅全集』p.137）

2.2 翻訳に見られる“失恋”

1910年代後半以降、翻訳に“失恋”の使用が見えてくる。管見が及ぶ限りでの早い使用は、1918年の周作人の翻訳〈貞操論〉と思われる。これは、周作人が「日本の先覚者たち言論を中国人に読ませるために⁽⁹⁾」と、与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」を抄訳したものである。周作人は、「片恋」を“単相思”と翻訳している一方で、「失恋」は日本語をそのまま“失恋”としている。

- 6) 片恋と云ふのも、失恋と云ふのも、また其れまでに達しない程度の異性に対する淡い愛情も一切不貞不純の事実になります。(与謝野晶子「貞操は道德以上に尊貴である」『人及び女として』1916：『与謝野晶子全集』文泉堂、1976、p.173)

無論単相思無論失恋、或只是對於異性的一種淡淡愛情，便都是不貞一。

(周作人訳〈貞操論〉《新青年》第4卷第5号、1918.5、p.389)

1920年代、中国では、近代恋愛観に関する日本の随筆などが多く翻訳されたが、1922年にY.D.は、賀川豊彦の「失恋に就て」を抄訳している⁽¹⁰⁾。Y.D.は賀川の「失恋そのものは必ずしもうれしいものではありません」を「悲しいものではありません」と意味を変えて訳しているものの、日本語の「失恋」はそのまま使用している。

- 7) そういつたところで、失恋そのものは必ずしもうれしいものではありません。(賀川豊彦「失恋に就て」『星より星への通路』改造社、1922、p.269)
這樣説来、失恋未必是可悲的事。

(Y.D.訳〈告失恋的人們〉《婦女雜誌》第8卷第5号、1922.5、p.27)

1928年には、夏丐尊が、厨川白村の『近代の恋愛観』を完訳しているが、やはり、日本語をそのまま“失恋”と訳している。

- 8) たとひ失恋ではなくとも、女性との関係に於いて最も深い人間苦を味はつた事は、バンズもシエリイもキイツもバイロンも、みな同様であった。(厨川辰夫『近代の恋愛観』改造社、1922、p.87)
即不失恋而在與女性的關係上嘗過最深的人間苦者，如彭斯 (Burns)，如雪萊，如濟慈 (Keats)，如參拜 (Byron) 皆是。

(夏丐尊《近代の恋愛観》開明書店、1928、p.62)

2.3 創作作品に見られる“失恋”

小説での“失恋”の早い使用は、管見の及ぶ限りでは、1920年の張資平の

処女作〈約檀河之水〉に見られた。この小説は、中国人留学生が日本人女性に失恋したことを題材とし、その悲しみや苦しみが描かれている（用例9）。

張資平は1922年の身边小説にも“失恋”使用しているが（用例11）、張資平以外では、1921年の郭沫若の〈湘累〉や1922年の田漢の〈咖啡店之一夜〉にも“失恋”の使用が見られる（用例10、12）。郭沫若や田漢は、1921年に張資平とともに、創造社を結成したメンバーであったことから、1920年代初期、創造社の作家にとって、作品に“失恋”を使用することは、創作の上で、重要な要素だったのではないだろうか。

9) 他受了良心的苛責，近来又新嘗失恋的痛苦，所以他忘魂落魄似的跑到這海濱來。（張資平〈約檀河之水〉《学芸》第2卷8号、1920.11、p.2）

（彼は良心がとがめ、最近又新たに失恋の苦しみも味わったので、魂の抜け殻のようになってこの海岸にやって来た）

10) 他来誘我去結識些美人，可他時常使我失恋。（郭沫若〈湘累〉《学芸》第2卷10号、1921.4《郭沫若全集》第1卷、人民文学出版社、1982、p.20）

（悪魔はおれを美人に紹介するが、おれはたびたび失恋の苦杯を嘗めさせられる）（須田禎一訳『郭沫若詩集』雄渾社、1977、p.25）

11) 做生意虧本的，投機事業失敗的，學校考試失敗的，失恋的多跳進這火口里去。（張資平〈沖積期化石〉創造社出版部、1922初版：1928第3版、p.240）

（商売で損をした人、事業投機に失敗した人、学校の試験に失敗した人、失恋した人など、多くの人がこの火口に飛び込んだのだ）

12) 林先生，你到底有甚麼那樣難過的事情？難道您也失恋了嗎？他們喝

酒的少爺們，幾乎十個有九是自稱失恋的，我不信林先生也是那一種「模擬失恋者。」

（田漢〈咖啡店之一夜〉《創造季刊》第1卷第1期、1922.3、p.47）

（林さん、一体どんな辛いことがあったの。まさか、あなたも失恋したんじゃないでしょうね。酒を飲んでいるあのお坊ちゃん達は、ほとんどが、失恋したと自称しているけど、私は林さんもあのような「擬似失恋者」だとは思えないわ）

前述したように、魯迅は1908年の〈摩羅詩力説〉の中で“失愛”を使用していた。しかし、1924年12月に発表した詩の題目は〈我的失恋—擬古の新打油詩〉（《語絲》第4期）とし、“失恋”を使用している。尤も、この詩は当時、失恋の詩が流行したのを諷刺するために書いたようである⁽¹¹⁾。1918年に周作人の翻訳に“失恋”が使用されたこと、1920年代初めに張資平をはじめとす

る創造社の作家の創作作品などに“失恋”が使用されたことと、魯迅が1924年に“失恋”を使用したこととは、関連があるのではないと思われる。

1920年代後半にも、“失恋”は、張資平の恋愛小説に多く使用され（用例13、14）、1926年、29年には、創造社の作家以外の茅盾や老舎の小説にも使用されている（用例15、16）。

13) 但又有同学説，雲姨母在S市失恋後才抱独身主義的。

（張資平《飛架》創造社出版部、1926、p.7）

（しかし、またある同級生は、雲叔母さんはS市で失恋してから独身主義を決心したと言った）

14) 璉珊，就今日的我的情形——失恋和疾病的情形而論，我後悔和你認識了。

（張資平〈約伯之淚〉《東方雜誌》第23卷第4号、1926.2、p.218）

（璉珊、今の僕の状態、つまり失恋と病気の状態から言えば、僕は君と知りあったことを後悔している）

15) 抱素惘然答道：「你不知道戀愛着是怎樣地熱烈不顧一切，失恋了是怎樣難受呢！」

（茅盾〈幻滅〉《小説月報》第18卷第9号、1927.9、p.15）

（抱素は茫然として答えた。「恋愛中だとどれほど熱烈に一切を顧みることがないか、また、失恋するとどんなに苦しいか、君は知らないだろう！」）

16) 把紙旗子放下，去讀書，去做事；和把失恋的悲号止住，看看自己的志願，責任，事業，是今日中国——破碎的中國，破碎也還可愛的中國！——的青年的兩付好葯！

（老舎〈二馬〉《小説月報》第20卷9号、1929.9、p.1510）

（紙の旗を捨てて、勉強をし、仕事をするのと、失恋の号泣を止めて、自分の意志と責任と事業とを見つめることは、今日の中国——破壊された中国、破壊されてもなお愛すべき中国なのだ！——の青年の二服の良薬である）

（竹中伸訳「馬さん父子」『老舎小説全集3』学習研究社、1982、p.185）

“失恋”の辞典への収録は、1928年の《綜合英漢大辭典》（商務印書館）に、lovelornの訳語として“失愛”と“失恋”が併記されているのが確認できる。国語辞典では、1915年の《辭源》（商務印書館）や1931年の《辭源 続編》（商務印書館）に“失愛”及び、“失恋”の収録は見られなかった。“失恋”は、1930年の《王雲五大辭典》（商務印書館）に収録され、その後は、《標準語大辭典》（商務印書館、1935）、《商務印書館、国語辞典》（1945）と続く。

3. おわりに

日本では、「失恋」は、1896年の小栗風葉の小説に早い使用が見られた。以後、創作や翻訳に使用され定着したと思われる。

一方、中国語では、“失愛”や“失愛的”が1910年頃までの英華・華英辞典に収録され、1908年の魯迅の作品にも“失愛”が使用されたが、1918年の周作人の翻訳や、1920年代の張資平の恋愛小説、さらに創造社の作家たちに“失恋”が使用された後、“失恋”が次第に定着していったと思われる。

注

- (1) 沈1998、p.46。
- (2) 1920年代に中国語に受容され日本語借用語彙の研究として、朱京偉『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門用語を中心に—』（白帝社、2003）があり、音楽用語が中国語に受容されたことを明らかにしている。
- (3) 主要テキストとして、『張資平作品精選』（長江文芸出版社、2003）を使用した。適宜、同時代のその他の作品も考察対象とした。『張資平作品精選』は、1920年から30年までの14編（内、12編が恋愛小説）を所収。
- (4) 本稿では、特に、日本語と中国語の区別が必要な場合、日本語は「」、中国語は“ ”を用いて表記した。尚、用例の日本語訳は、引用の明記がないものは、拙訳である。
- (5) 小田切進編『日本近代文学大事典』講談社、1984、p.314。
- (6) 小説では、徳富蘆花『不如帰』（民友社、1900、p.147）、紅葉山人『続々金色夜叉』（『読売新聞』1901.4.7）、木下尚江『火の柱』（『毎日新聞』1904.1.4）など、また翻訳では、かげろふ訳『独詩評釈（涙の慰藉）』（『こころの華』第4巻第8号、1901.8、p.30）、上村左川訳『おもかげ』（『文芸倶楽部』第7巻第13号、1901.10、p.116）、厨川白村訳『夢なりしか』（『帝国文学』第9巻第9号、1903.9、p.38）などに「失恋」の使用が見られた。
- (7) 柳父1982、p.4。
- (8) 聖書翻訳において、「翻訳委員会」による「委員会訳」（1880）が、love（約翰15章9節）の訳語として「愛」を採用したことも、「愛」と「恋」の住み分けに繋がった可能性もあると思われる。
- (9) 周作人訳〈貞操論〉《新青年》第4巻第5号、1918.5、p.386。
- (10) 西楨1993は、Y.D.について、1920年頃に日本に留学していた、呉覺農（1896～1989）だとしている。
- (11) 魯迅〈我和《語絲》的始終〉《萌芽月刊》第1巻第2期、1930.2（《魯迅全集》人民文学出版社、1981、p.166）

参考文献

- 広田栄太郎 1969 『近代訳語考』 東京堂
- 森岡健二 1991 『改訂 近代語の成立 語彙編』 明治書院
- 西槇偉 1993 「1920年代中国における恋愛観の受容と日本—『婦女雑誌』を中心に—」 『比較文学研究』 通号64号
- 佐藤亨 1999 『国語語彙の史的研究』 おうふう
- 沈国威 1998 「新漢語研究に関する思考」 神戸松陰女子学院大学国文学文学研究室『文林』 第32号
- 2008 『改訂新版 近代日中語彙交流史』 笠間書院
- 柳父章 1982 『翻訳語成立事情』 岩波書店
- 張競 1995 『近代中国と「恋愛」の発見』 岩波書店
- 朱京偉 1995 『『明治のことば辞典』と現代中国語における日本語からの借用語』 『明海日本語』 第1号

付記：本稿は、2008年度中国化学会大会（2008年6月28日、於横浜市立大学金沢八景キャンパス）における口頭発表「張資平作品にみられる恋愛用語」を加筆・修正したものです。発表の際、多くの先生方に有益なご教示を賜りました。ここに記して、感謝申し上げます。

(筑波大学大学院・研究生)